

中国軍最高人事発令の背景

KDR 編集部 20121120

最近中国政府が発表した中国軍の四総部、各軍種の司令の名簿を見ると、中国の党と軍の関係は、すでに”後共産主義時代”に入った。すなわち旧ソ連の1970年代の党と軍の関係に極めて似てきた。結論から述べると、今回の最高人事は、基本的に規律化された人事に変化した。当然、総政治部主任は、依然政治と強い繋がりを持つ。これが特徴の一である。特徴の二は、最高統帥部の首脳たちは、一様に”専門学校卒”であり、学歴知識水準がロシア軍、NATO 軍に比べはるかに劣っていることである。特徴の三は、人事全体が、中国軍の保守的な思想を反映していることである。今回の上層人事の下では、軍機構の大きな改革などは期待できない。党の軍隊から国家の軍隊への転換も同様に期待薄である。

最初に人事の規律性から見ていく。本誌は、第17回全国人民代表大会以降、総政治部主任の人選だけでなく最高人事全体が、首尾一貫した規律性を持つようになったと考えている。古参の軍事委員会委員、68歳を超える委員は完全に引退し、後任は全て新人になった。四総部に入った首脳陣は、全て大軍区のトップからの昇任であり、海空軍及び二砲の司令は副総参謀長から昇進した。この規律性は、習近平時代が”年老いた軍人の保護の下に船出する”時代がすでに終了したことを意味する。それに取って代わり、制服軍人が相対的に政治の核心から離れ、政治に直接干渉せず、進退について正常な活路を得るようになった。ブレジネフ時代のソ連は、このような原則を採用し、もはやジュコフ元帥のような国防部長は必要とせず、軍用輸送機を利用して地方の中央委員をモスクワに輸送し、フルシチョフとの権力闘争に参加させた。

最初に高層首脳の最新名簿を見よう。

参謀総長：房峰輝大将、61歳、元北京軍区司令、国防大学研究系戦略指揮専科卒（履修期間が4年か2年かは不明）

総政治部主任：張揚大将、61歳、大学通信教育卒、国防大学基本課程（2年）卒、元広州軍区政治委員

総後勤部主任：趙克石大将、65歳、軍事学院参謀課程卒、専門学校卒。元南京軍区司令。中越戦争に参加。

総装備部部長：張右侠大将、62歳、元瀋陽軍区司令。中越戦争に参加。学歴は

不明であるが大学は出ていない。

海軍司令：孫建國大將、60 歳、潜水艦学院卒、1996 - 2000 年海軍潜水艦基地副司令（所属基地不明）、2004 - 2006 年海軍参謀長、2009 年副総参謀長。

空軍司令：馬曉天大將、63 歳、専門学校卒、2003 - 2006 年空軍副司令、2006 - 2007 年国防大学校長、2007 年副総参謀長（外交担当）。

第二砲兵司令：魏鳳和大將、58 歳、第二砲兵指揮学院専門課程、国防大学入校、専門学校卒、第 54 基地（青海省）司令、2002 年第 53 基地（楚雄）司令、2006 年第二砲兵参謀長、2010 年副総参謀長。

総政治部主任及び第二砲兵の新任司令だけでなく、上述人事の背景は、最近本誌が逐一分析したのでここでは省略する。

まず四総部の首長を見ると、それぞれ北京、広州、南京、及び瀋陽軍区から来ているので、これは当然と言える。党代表大会の前に四総部の首長は軍区の首長から昇進した。その後、10 年の間に、各自相互に職位を交換する。これは既に制度化されている。梁光烈、陳炳徳も同様に相互に職位を交換した。

上述の 4 個軍区は重要軍区である。ある人は、瀋陽軍区の戦略的意義を低く見ているが、低くはない。朝鮮半島、中日関係が緊張すると瀋陽軍区は担当正面になる。済南軍区、蘭州軍区、成都軍区の司令は 4 総部の首長にならなかったが、重要軍区でないからではなく、任務は重要である。国防部長及び軍事委員会副主席に、少なくとも 2 名抜擢する必要がある。その中に済南軍区司令の範長龍が抜擢される可能性が高い。彼は砲兵出身で専門学校卒である。彼は兵士から司令まで上りつめた独特の経歴を持つ。しかも瀋陽軍区及び済南軍区の 2 大軍区の参謀長及び司令を歴任した。中国陸軍は、ソ連と同様に従来から砲兵を特に重視している。砲兵は”戦争の神”と呼ばれている。済南軍区の地位は、最重要視されており北京、南京軍区に次ぐ。

中国軍の弱点は、第一に軍の最高首脳にある。過去に戦った経験(ベトナムとの戦争)を有する者は、ただ 2 人だけである。しかも現代化戦争を戦ってはいない。この点は、米国、ロシア、NATO 軍の首脳と比べると対称的である。

第二は、みな専門学校卒であること。本誌が何度も中国軍最高首脳の学歴を問

題視する理由は次の通り。

米軍は平均 4.5 人に 1 台コンピューターを使用している。現代の軍隊は一個の現代的な大企業と言える。米国及びロシア軍の最高首脳は全て大卒であり、博士もいる。典型的なロシア軍首脳は、必ず大学本科を卒業し、さらに総参謀部軍事大学で教育を受けている。教育期間は全部で 6 年である。例えば、戦略ロケット軍司令は、ほとんどチュレジンスキー軍事大学を卒業しその後また総参謀部軍事大学で学習している。装甲兵司令は、ほとんどマリノフスキー装甲兵学院を卒業し、その後総参謀部軍事大学で学習している。完璧な学歴が無ければ、現代の知識を理解することはできない。元モスクワ軍区司令 I.YVREMOV 大將は哲学副博士であった。米軍は言うまでもない。

第三、年齢が高齢である。その理由は中国軍内の昇任速度が遅いからである。上述の中国軍の新首長の平均年齢は 61.42 歳である。ロシアの現代の軍区司令の平均年齢は 50 歳である。1992 年に就任した極東軍区司令 CHICHEVATOV 大將の年齢はわずか 47 歳であった。

米軍の現任の統合参謀本部議長 MARTIN DEMPSEY 大將は、1952 年生まれの 60 歳である。二つの修士学位を持ち 4 回専門学校に学ぶ。DUKE 大学英文科卒である。陸軍出身でイラク戦争に参加した。

副議長、海軍大將の JAMES A. WINNEFELD は 1956 年生まれの 56 歳である。GEOGIA TECH 大学卒。WAR COLLEGE に学ぶ。水上艦、空母指揮官出身。空母エンタープライズを指揮しアフガン戦争に参加。

陸軍参謀総長 RAYMOND T. ODIERNO 大將は 1954 年生まれ、58 歳。湾岸戦争、イラク戦争に参加。二つの修士学位を持つ。NORTH CAROLINA 州立大学卒。海軍 WAR COLLEGE に学ぶ。

空軍参謀総長 MARK WELSH 大將は 1953 年生まれの 59 歳。湾岸戦争に参加。F-16 戦闘機のパイロット。14 回専門学校で学ぶ。WENTWORTH MILITARY ACADEMY AND COLLEGE 卒。WEBSTER 大学で修士学位取得。

海兵隊総司令官 JAMES AMOS 大將は最も高齢で、1946 年生まれの 66 歳、これは比較的珍しい例である。イラク戦争に参加。パイロット出身。IDAHO 大学卒。

海軍作戦部長 JONATHAN W. GREENERT は 1953 年生まれ、59 歳。ロサンゼルス級原子力潜水艦艦長出身。第七艦隊勤務。米国 NAVY COLLEGE 卒。中米両国の海軍司令はいずれも潜水艦部隊出身である。上述の米軍最高統帥部首脳
の平均年齢は 59 歳である。

現在の中国海空軍、及び第二砲兵司令の弱点を見てみよう。海空軍司令の下積み時代は 1970 年から 80 年代である。海軍司令の出身は潜水艦であるが、この人事は非常に不可解である。米海軍作戦部長は、大部分水上艦及びパイロット出身である。1983 年以降米国海軍作戦部長に就任した原子力潜水艦出身者は僅かに 2 名であり、この人事は異例とされている。中国海軍の不可解な人事は、根底にある根の深い”小、快、潜”思想が影響しているものと思われる。当然別の解釈も成り立つ。すなわち中国及び米国は、冷戦後、海軍核戦力の第二次攻撃／核反撃能力を高度に重視した、したがって潜水艦部隊を背景にした司令を任用した、と。

また中国の海軍司令は、すでに三代続けて潜水艦出身で占められ、しかも第二次大戦水準の潜水艦経験者である。このことは、中国の大型水上艦隊及び航空部隊建設事業を推進するためには不利である。孫建国が潜水艦部隊副司令に就任した時期は 2000 年以前であり、年齢から見て、彼は第一線で現代の KILO 型潜水艦や元級潜水艦等を操縦したことはないと思われる。

馬曉天も状況は同じであり、”J-6、J-7 出身の司令員”である。彼が写った関連写真を見ると、ソ連型の地上から J-6 戦闘機を指揮する姿或いは J-7 のコクピットに座った姿である。これらの状況を米軍及びロシア軍と比較すると、明らかに落差がある。また今日の中国海空軍の最新装備と両司令の下積み時代の装備を比べると、画期的な落差がある。米国の空軍参謀総長の場合は、自ら経験した技術と現行の技術の差は一世代程度の差である。言い換えれば、現在までに就任した米国空軍参謀総長は、大部分第三世代戦闘機を操縦した経験を有する者から人選している。

第二砲兵司令は、DF4 及び DF21 基地の経験を有する。これは、このポストに就く人は必ず長距離戦略ミサイルを指揮した経歴を持たねばならないことを示している。

上述の 3 名は、すべて副総参謀長の経験があり、制度化の過渡期にある。すなわち本来の職種から来た彼らに、総参謀部で全局の経験をさせ、”複合型人才”

の資質を具備させてから、元の職種に戻すのである。このような制度は、すでに慣例になったと思われる。したがって 3 名が元の軍種の司令に就任したのは意外ではない。今後、海空軍出身の副総参謀長は、未来の海空軍司令の最有力候補者である。

範長龍大将のほか誰が軍事委員会に入りそうであろうか。その人が軍事委員会に入るということは、副主席としての人選になるのが自然だ。現任の海空司令が最有力であり、この点は近年の海空軍を重点的に強化していることから推測することが出来る。第二砲兵司令については、過去軍事委員会副主席に昇任した例はない。

許其亮大将、62 歳、国防大学基本課程、戦役進修課程、幹部訓練課程で学習、相当重視されているようだ。戦闘機パイロット出身。年齢は 62 歳で前回の軍事委員会の委員の中では最年少。

元海軍司令呉勝利大将、67 歳、解放軍測絵学院卒、極めて少ない大学本科卒。また水上艦出身で、中国の大海軍建設及び空母艦隊建設のために適任の人事である。しかし年齢が高過ぎ、この点は許其亮大将に比べると劣る。

一旦軍事委員会副主席に就任すると、少なくとも 5 年は留まる。許其亮大将は年齢制限内に留まるが呉勝利大将は年齢超過してしまう。上述のごとく中国軍の上層昇任人事はすでに高度に制度化しており、この点から見て、許其亮大将は呉勝利大将に比べ軍事委員会に留まる可能性が高い。

最後の一人は、当然今期軍事委員会中の最年少者である常萬全大将である。63 歳、中華人民共和国と同年齢であり、軍事委員会委員に再任された。68 歳を超えるので 5 年後には退職となる。しかも彼は胡錦濤時代に唯一軍事委員に抜擢された人である。全ての上層の職務はすでに内定しており、残りは国防部長のみである。ひょっとすると、常萬全かもしれない。当然彼は今後 5 年以内に軍事委員会副主席の席を狙う資格がある。本誌は彼だと見ている。彼は兵士から司令に登りつめた人物で、国防大学戦役教育研究室主任、蘭州軍区及び北京軍区参謀長、瀋陽軍区司令を歴任した。このように 3 大軍区の経歴を有するのは、房峰輝大将のみである。多くの研究によると、国防部長は閑職であり、本誌もそう考えている。しかし次の 2 点を特に注意する必要がある。一つは、部長個人が軍事委員会会議を通じて非常に大きな決定権を保有していることである。特に軍事外交に関してである。二つ目は、10 年以内に 4 総部の首脳の入れ替え

が規定されており、国防部長は総参謀長に補任される可能性がある。

以上